あとがき

ムージルについての本を書くつもりだった。構想の当初から、本書はいっかんして「ムージルの可能性感覚」という仮題をまとっていたし、この本のもとになった学位論文もまた、おなじ表題を付して京都大学文学研究科に提出された。だが、完成した原稿をまえにして、松籟社の竹中尚史さんはひとこと、「これはムージルについて書かれた本ではありませんね」と言われた。ムージルの「可能性感覚」について書かれた本ですらなく、ムージルの可能性感覚を触媒として、著者であるわたしが自身の思考を自由に展開した本であろう、と。いっぱしの独文学者のつもりであったわたしはその言葉を聞いて呆然としたが、しかしただちにそれを称讃の言葉へと翻訳（誤訳？）し、いさぎよく表題から「ムージルの」という言葉を削った。

たしかに、ムージルについて書こうという当初の意気ごみは、いつしか薄れていたかもしれない。この本を構想した当時、ムージルの名はドイツ文学の枠を越えてすでに広く知られていた。折りからの世紀末ブームのなかでひとしきりにぎわいを見せたヴィーン文化史の枠すらも越えて、現代日本を代表する作家たちが、

あるいはまた現代思想の最先端を走る論客たちが、ムージルを引用し、彼の『特性のない男』について語っていた。だがわたしには――古井由吉とジャック・ブーヴレスを例外として――かれらの議論がどこか肝心なところで的をはずしているように思われた。確たる根拠にもとづく反駁というのではない。ドイツ語を読むことをなりわいとする人間が日ごろ肌で感じているムージルと比べて、どこかしらちがうという違和感のようなものである。であれば、だれかがムージルについてのスタンダードな研究書を書かねばならない、と思った。どのような解釈をするにしろ、これがスタンダードなムージルだと言えるような研究があってこそ、そこからの偏差と逸脱も測定できるようになる。カフカやリルケやマンについての本はすでにいくつも積みあげられていたが、そのようなスタンダードなムージル像を提示する研究書は、なぜかまだ書かれていなかった。だれも書かないのなら自分で書こう――まだ若かったわたしは、ためらわずにそう決意した。

本書成立の起源は十年前にさかのぼる。竹中さんとはじめてお会いしたのは、いまからちょうど十年前にあたる一九九二年の秋の日のことだった。四条通りに面したちいさな喫茶店でそのときどのような構想を語ったか、もはや記憶も定かではないが、数日後「いい本を作りましょう。そのためなら十年でも待ちます」というお返事をいただいた。その言葉にうなずきながら、しかしまさか本当に十年もかかることになろうとは思ってもみなかった。当時三十代半ばだったわたしにとって、十年とは、とほうもない遠方をはらんだ時間のように思われた。

すでに書きためてあった論文をもとに、あらたに数編の論考をつけ加えれば一書となる、というのが当初のもくろみだったように思う。幸い一九九四年から九六年までの三年間、文部省の科学研究費補助金も交付されることになり、一九九七年の完成を目指した。だが、この五カ年計画で書くことができたのは、第一章と、第五章から第七章にかけての部分、つまり本書の約半分にあたる計四章にとどまった。以下、かんたん

に本書成立の経緯をたどっておけば、一九九二年の段階で書かれていたのは、第五章「反転する世界」（ただしカネッティを論じた第五節を除く）、第六章「可能性感覚の誕生」、第七章第四節（バッハマンを論じた「ユートピアとしての文学」）にあたる部分である。これらははじめ、さまざまな機会、さまざまな場所に、それぞれ独立した論文として書いたものであるが、すでにこの時点で〈可能性感覚〉を核とした論考群が成立していたのがわかる（だから、これをもとにすればすぐにでも一書がなると考えていたのだろう）。以後、成立順に、第一章、第五章第五節、第七章、第二章、第三章、第四章が、そして最後に第八章が書かれた。

第一章のもとになったのは、一九九四年の春、東京大学でおこなわれた日本独文学会のシンポジウム「ムージルの現在」における口頭発表「可能性感覚の射程」である。鎌田道生さん、赤司英一郎さん、北島玲子さん、浅井健二郎さんとともに立ち上げたシンポジウムは、まとめ役にあたられた浅井さんの絶妙な采配のおかげでとても楽しいものだったが、わたしはその原稿を最初から、本書の導入部とするつもりで書いた。それをすぐに共著のかたちで出版できたのは、鎌田さんのおかげである。鎌田さんは、関西を中心に組織されたムージル研究会の中心メンバーとして、この会の長年にわたる研鑽の成果を本にするために尽力され、それは一九九五年の『ムージル 思惟する感覚』（鳥影社）となって実を結んだ。

第五章第五節は、日本独文学会の機関誌『ドイツ文学』第九七号（一九九六）の特集「周縁地域とドイツ文学」のために書かれた（旧題は「越境する精神、あるいはカネッティの《可能性感覚》」）。世話役のひとりであった平野嘉彦さんから「このテーマでカネッティについて書きませんか」と声をかけられ、無謀にもお受けしたが、ここで書いたことは「周辺人の思考」として本書の末尾にまで痕跡を残しているだけでなく、それ以後の書き方にどうやら決定的な影響をあたえたようだ。というのも、それまで「ドイツ文学研究」という枠のなかで学会の作法にしたがって仕事をしてきたわたしが、カネッティの「越境する精神」を讃美す

ることで、まるでそれに呪縛されるかのように――あるいは解放されるかのように――以後「文学研究」の枠を越えて、哲学的思惟とのまじわりを開始するからである。ムージルが「哲学者（フィロソーフ）」（P・カンピツ）であり、彼の『特性のない男』が「哲学者の小説」（S・トゥールミン／A・ジャニク）である以上、それは早晩さけて通れない越境だったかもしれないが、くりかえされる越境の過程で、わたしはしだいに個々の哲学者の（奇矯な）思惟に魅了されていき、それと並行して、これまで思ってもみなかった文学と哲学の邂逅のシーンがつぎつぎとわたしの眼前に開けてきた。それはむろん、文学と哲学のあいだに強固な垣根を築いたりしないヨーロッパ知識社会の重層的厚みによるものであるが、ムージルとライブニッツ、ライブニッツとヴェラス／メルシエ／シュナーベル、カントとヴィーラント／ラスヴィッツ……と、いわゆる実証性とは異なるレヴェルで開示される文学と哲学の邂逅シーンを追ううちに、わたしの関心もまた、「ムージルの可能性感覚」から「可能性感覚」それ自体へと、おそらく徐々に移行していったのであろう。竹中さんに指摘されるまでほとんど自覚していなかったものの、この越境がなければ、本書がこのようなかたちで成立することがなかったのは確かである。

それが無謀な越境でなかったかどうか、いまとなっては読者の判断を待つしかないが、この越境を可能にしたのは、カネッティの「越境する精神」を讃美したことにくわえて、それ以前にムージルの学位論文である『マッハ哲学判定への寄与』について論じた経験があったからだと思う。ライブニッツにしろマイノングにしろ、ムージルとのかかわりの重要性は早い段階で意識していたにもかかわらず、哲学的思惟の敷居の高さに、どう切りこんでいいものか考えあぐねていたわたしを前方にむけて強く押しだしたのは、おまえはすでにマッハについて語ったことがあるではないか、という内心の声だった。そして、わたしがマッハ哲学について語り、ムージルの『マッハ哲学判定への寄与』を論じることができたのは、そこに得がたい先達と

して早坂七緒さんがいたからである。ムージルにとってのマッハの重要性にいちはやく着目した早坂さんは、ローヴォルト書店から『マッハ哲学判定への寄与』の復刻版が出版される一九八〇年以前にベルリーン大学所蔵の学位論文をコピーで入手し、その詳細な「紹介と評価の試み」をされた。この重要なお仕事は足かけ十年におよび、一九八六年にいたってようやく完成するが、参考文献としてあげたこの三編の「ムージルのマッハ論文」の導きがなければ、本書の第六章「可能性感覚の誕生」が書かれることはなかったであろう。そして、この第六章が本書全体の礎石となっていることを思うとき、早坂さんから受けた学恩はいくら強調しても強調しすぎることはない。

こうして哲学的思惟の世界へ開かれていったわたしは、第七章（旧題「ムージルとマイノング」）を皮切りに、第二章（旧題「ムージルとライブニッツ」）、第三章（旧題「生成するユートピア」）、第四章（旧題「世界の複数性について」）を書いていった。これらははじめ、大学の紀要に書いた第二章を除き、いずれも『希土』に掲載したものであるが、京都のゲルマニストたちの同人誌である『希土』は、このときのわたしにとって願ってもない場であった。原則として註はつけない、本文中にドイツ語を挿入することも控える、という二項を不文律とするこの奇妙な雑誌『希土』は、また原稿にも制限枚数をもうけず、それどころか一部の同人のあいだでは「たくさん書けば書くほどえらい」という、外部の人にはちょっと信じがたいであろう野蛮な価値基準が共有されてもいたからである。この反時代的な雑誌のおかげで、わたしは学会の作法にとらわれることなく自由気ままに長い論考を書くことができた。第四章のもとになった論考の一八〇枚という記録は、現在にいたるまで『希土』における「最長不倒距離」である。

このようにして書かれた第七章第三節までの部分は、はじめに述べたように、「ムージルの可能性感覚——中欧におけるその精神史的系譜」と題し、京都大学大学院文学研究科に博士学位論文として提出された。

それが受理され、二〇〇〇年三月に学位が授与されるにあたっては、恩師である山口知三先生にたいへんお世話になった。山口先生は、一九九九年の秋になっても論文を完成させられないわたしを励まし、ときには「無理しなくてもいいよ」という挑発の言葉でわたしの反発心を煽り、最終的に論文の提出へと導いてくださった。審査にあたっては、スタンダードなムージル研究からは大きく逸脱してしまった論文の、しかしその基底部になおも残っているアカデミックなものの存在を見分けられ、そのうえで融通無碍に可能性感覚の系譜を論じる著者の「筆力」を評価していただいた。その懐の深い受容力がなければ、わたしがこのような気ままなスタイルで書きつづけることもできなかったのではないかと、いまにして思う。学部時代から数えてすでに四半世紀におよぶ先生の学恩に、そしてまた、審査にくわわっていただいた（当時）京都大学の薗田坦教授（西洋哲学史）、松村朋彦助教授（ドイツ文学）にも、この場を借りてあつくお礼申し上げたい。

学位論文は成ったものの、まだ本にはならない。ひとつには、学位を授与された直後の二〇〇〇年三月から文部省の長期在外研究員としてヴィーン大学に赴き、翌年一月に帰国してのちもなお、しばらく学内の雑用に忙殺されていたためであるが、そうした外的要因だけではなく、論文自体にはらまれた問題もあった。論文の審査後、日本を発つ直前にお会いする機会があった折り、山口先生から「いまのあなたなら、最後の章は別の書き方があったかもしれませんね」と言われた。ヴィーンにいるあいだ、それがずっと気になっていた。帰国後、竹中さんと本書の出版にむけて最終的な打ちあわせをしたとき、竹中さんからも、第七章がすこしものたりないので加筆してはどうか、と勧められた。やってみましょうと答えたが、ヴィーン滞在を契機としてふくらんできた新たな仕事への取りくみもあって、なかなか思うようにならない。いっそ、その新たな仕事との関連で書いてみようと思ったのが今年になってのことで、大学院の講義で今年度とりあげた

マンハイムをムージルと結びつけて論じるうちに成ったのが、第八章である。哲学への越境のあと、もはやなにも怖いものがなくなったわたしの、今度は社会学への越境であるが、一九二〇年代末のドイツにおけるユートピア的意識の消失を危惧するマンハイムの論は、（第一章で述べた）現代日本のユートピア的思惟の消滅を危惧するわたしの論と呼応して、本書の帰結を導きえたのではないかと思う。

なお、そのさい第七章に、新たにバッハマンを論じる第四節をもうけただけでなく、第三節のP・カンピツの議論をめぐる部分にもおおきく加筆した。それが可能となったのは、日本では翻訳でしか読めなかったカンピツの本を、オーストリア国立図書館の特別室で閲覧できたからである。帰国まぎわの雪の日に、身分証明書もたずに特別閲覧室を訪れたわたしをパスポートのコピーだけで受けいれてくれた職員に感謝するとともに、伝統あるヴィーン大学の講義室に（まるで全共闘世代のおじさんのように）ジーンズ姿で登場し、現代思想について低い声で語っていたカンピツさんのことがなつかしく思い出される。

ヴィーンではまた、「ムージル研究」叢書の編者として知られるJ・シュトゥルッツさんともお会いすることができた。これも早坂さんのお引き合わせによるのだが、当時ヴィーン大学日本学科の客員教授をされていた赤司さんもいっしょに、カフェ・ムゼーウムで待ち合わせ、四人でヴィーンの街を深夜まで徘徊した日のことは、いま思うと夏の夜の夢のようである。そのとき、自己紹介をかねて本書の——正確にいえば学位論文の——目次をドイツ語にしたものをシュトゥルッツさんに見せたところ、彼はゆっくりとそれに目を通し、まじめな（とぼけた？）顔をしてこう言った。「この本を出版すれば、ヴィーン大学の哲学教授になれますよ」。

出版のための細かい条件まで教えてくれたシュトゥルッツさんには申し訳ないが、べつに「ヴィーン大学の哲学教授」になりたいとも思わなかったので、本書をドイツ語で出版する話はそのままになっている。そ

れよりも、この本が日本の松籟社から出ることを喜びたい。あらためていうまでもなく、それが一九九〇年代に『ムージル著作集』を出し、ふたたび日本語で『特性のない男』を読めるようにしてくれた志ある出版社だからであるが、もうひとつ、本書を書くことで、自分がこれまでやってきたことの意味がおぼろに見えてきたからでもある。わたしはこの本を、世界のドイツ文学・思想研究に寄与するために書いたのでは、おそらくない。はじめ日本におけるムージルの読者にむけて書きはじめられた本書は、この間たえず専門家の厳しい目を意識しつつ、しかし最終的には専門家ギルドの内部にむけてではなく、ムージルの蒔いた〈可能性感覚〉という種をもとに、来たるべきユートピア的思惟のあり方に思いをめぐらしてくれるであろう（専門家をふくむ）すべての読者にむけて書かれたのである。

いつの日かこの本を書き終われば――「自分の人生から」とは言わぬまでも――ムージルからしばしの「休暇」をとることができると思っていた。もう何年も前からこの国における教養の崩壊、オルテガのいう「大衆」の充満が気になっていたわたしは、どういうめぐりあわせか、ようやくあたえられた在外研究の滞在先ヴィーンでも、J・ハイダー率いる極右・自由党が政権参加した直後のオーストリアに吹き荒れる反知性主義の嵐を体験することになり、その体験にも後押しされて、次の研究テーマは教養論・大衆論にしようと思いさだめていたからである。帰国後、オルテガを起点に、ヴィーラント、フンボルト、シュティフター、ブルクハルト、ニーチェ、M・ヴェーバー、トレルチ、H・ブロッホ、マンハイム、カネッティと結ぶ、教養をめぐる精神史研究の構想を立てたときにも、ムージルの名は（排除されないまでも）背景にしりぞいていた。ところが、「知のかげり・教養のゆくえ」をテーマにかかげて開始した大学院の講義で、二年目にあたる今年、マンハイムの『イデオロギーとユートピア』を学生諸君といっしょに読み、それと並行して本書の第八章を書くうちに、そこで教養の核心にあるものとして摘出された「現実を超越する意識」は、

可能性感覚にはらまれたユートピア的思惟と無縁ではないことに思いいたった。だとすれば、教養の精神史という新たな研究構想は、ムージルからの「休暇」どころか、ムージルの〈可能性感覚〉をめぐる議論を継承し、本書では指摘するにとどまった教養とユートピア的思惟の関係についてのより精緻な考察を起点にして展開されることになるだろう。

第一章の末尾近くで、わたしは本書の意図を、「正しい生」の在処(ありか)をつきとめようとして果たせなかったムージルが遺稿中に残したひとつの言葉に仮託して、次のように述べた。それは、未だ完了していないとムージルが言う「可能性人間の発展」を現代において引き継ぐための基礎作業である、と。本書を書き終え、次の仕事に向かおうとするわたしが胸にきざむのも、そのおなじムージルの言葉である。

可能性人間の発展はまだ終わっていない。

二〇〇二年十一月

大川　勇